

歌集

坂道その後

柏木 志津子



平成九年一月
～
平成十三年二月

墨色

わが留守に食べつくしたる千両の朱実^{あけみ}は鳥の胃の腑そめいむ

年移る鐘の音きえし冬天にオリオン星座位置たしかなり

木蓮の花芽に初日さしそめぬやがて狭庭にひかりは満ちん

若き日は思いみざりき神仏の加護を願いて深く頭^ずを垂る

箸紙に墨色さやかにめいめいの名をしたためし婿今年亡し

常に自分にきびしく生きし婿なりき写真の顔のおだやかに笑む

一年の計立つるなく夜半にむく林檎は内部に蜜をためいつ

寒
夜

深霜にその葉は乱れ水仙の六弁の花姿くづさず

いつしか、雨はみぞれに変わりいし葉ごもる沈丁の荅ぬらして

まれまれの寒の夕映え残雪の福智の山のうす紅の肌

着ぶくれてくぐまりて抜くきさらぎの雑草の根は意外につよし

日脚やや伸びしと思う雪柳のしなえる枝に芽吹く粒つぶ

老いて知るわびしさのひとつ日に幾度立居におのが骨のなる音

そばがらの枕に伝う耳鳴りの音に目覚めぬきさらぎ寒夜

(平成九年二月)

浅 春

日だまりの小さき楽園いぬふぐり咲きみち天道虫ら遊べる

畦道にそれぞれの位置しめて咲く日本タンポポ西洋タンポポ

美しきものの如くに流れおり水に同化せざる油が

ヒヤシンスの荅ほころぶ五いろのその球根のはち巻の色

実生よりそだちしわが家の山椿はにかめるがに葉陰に笑める

病む身清むる食と思ひ白粥ににじむくれない梅干一顆

老身をいたわり生きん罅入りし土鍋だいに扱うように

（平成九年三月）

蕨

愁いもち仰げば万朶のさくらばな慰撫する如くわれに向きいる
ふぶくを知らずひと片ひと片散りてゆく雨の路地うら一樹の桜
辛き昭和を夫子のありてかにかくに生き来て独り老女の明暮れ
うつうつと病みてかまわぬわが庭に季知りて咲く春蘭・海老根
ひと冬を調法したるチンゲンサイいま菜の花となりて蝶寄る
貝食めばよみがえるなり古里の海に浅蜊を掘りし感触
裏木戸より声かけわれを見舞いくるる友は摘みたる蕨片手に

（平成九年四月）

五月

日章旗戸毎に立てしはまぼろしか五月の風にはためきし音

ツバナゆるる畦道下校する子らの草笛の音の野にひびきつつ

薬くすりは苔こけついたり 台風たいふうに倒されて六年泰山木の

藤棚ふじだの若葉わがはの隙ひまにきよらかな五月の蒼き空の断片

老顔らうがんのわれにも似合う徳島ゆ子のプレゼントの藍染ブラウス

時をかけ伽羅路煮きやらぶきつめいる夕べ訃報ふほうは来たる雷いかずちのごと

戦後を共に働きし友、しかばねとなり今し乗る金色の車に

(平成九年五月)

盆地の街

峠より見放くる盆地しろじろとわが街飯塚・無人の如し

稲作文化発祥の地筑豊の母なる大河ぞ遠賀の流れ

まろやかになりし硬山^{ぼたやま}みどり生い炭都というは死語となりたり

この街に今も残れる川筋気質 慣るるに過ぎしわが五十年

わが庭にホタルブクロの花咲きぬ過ぎし日のごと訪い来よ螢

所在無く抜くあら草に点々とニワゼキショウのひと目の小花

夜半の玻璃戸に腹部さらして張り付ける幼き^{やもり}守宮も生きねばならぬ

(平成九年六月)

つゆ

雨に咲き雨に散りたる木斛もつしくの小さき花がら寄るにわたずみ 潦

唐突に來たれる地震ないに古家のきしみ揺るるにわれもゆれいつ

濁流の岸辺をあらう遠賀川 中州にたたずむ一羽白さぎ

様々にビルの間合を行く雲にバス待つ時間満たされている

読みさしの書に俯してたわいなく昼寝むさぼるわれに驚く

はげしき真夜の風雨に悲鳴あげながら終の棲家を守る庭木々

雷鳴の去りたる明けの空に見る久し振りなる山の稜線

(平成九年七月)

牛蛙の声

すがやかに合歡はあまたの莢実垂る酷暑にこもり無為のわが日々

池の面の菱の浮葉のあわいぬいアメンボの脚ひかりを散らす

いづくともなく供えし華に寄り来たる蝶あり静かな古里の墓地

否応なしに近づく死をば思いみる夕顔ほのとひらくを見ついやおうつ

魂送るひとりのわれを川の辺に今宵さやかな月のいざなう

古寺巡礼かなわぬ身となり映像の仏におのずと掌を合せ居り

またしても戦時の夢に覚めし真夜うめきの如き牛蛙の声

新 秋

掃き寄する桜落葉の朝々の梢あかるく秋となりゆく

紫を好みし姑の植えゆきしヤブランの花 木もれ日に咲く

林立の杉の下道うばゆりの時過ぎし花なお毅然たり

絶え間なく湧きては消ゆる泡の湯に老の痛みのほぐれゆくなり

静脈の浮きたるわが手いかぶりて「どうかしたの」と幼子は撫づ

年々の崖の山萩咲きそめて八十二歳の誕生日来る

したたかに庭木を打ちし雨やみて今朝の大気の肌にやさしき

（平成九年九月）

星野村（福岡県八女郡星野村）

あくがれて峠越え来し星野村まこと静かな山あいの里

石積みの峡の棚田の黄に稔り畦道ごとに彼岸花さく

昔ながらに稲架^{はぎ}に掛け干す村人の家族の働く姿うるわし

ひるとよのあわいの空のうつろいを天文館の高台に見る

いくたびも古里に見し天の川こよい山峡の空にかかれる

望遠鏡にまざまざとあり木星、土星いき物あらむ球体神秘

星々にまもられ眠る山里の秋夜やすけく時の過ぎゆく

（平成九年十月）

晩秋

いつしかに葉蔭に赤く藪柑子つぶらなる実を地ひくく吊る

時至りこぼれ落ちくるどんぐりの音の聞こゆる静けさに居る

返り咲く紅きつつじに寄り来たる秋の胡蝶の羽根いたみいつ

放し飼いのチャボがあわてて垣くぐる茶の花かおる通院の道

従順な馬の瞳よ 小春日の宿場祭りの街道を行く

百円玉の価値あらためて思いつつ百円市に品を選びゆく

吾亦紅ひともと野菜にそえくれし星野の里も秋深みいん

(平成九年十一月)

持ち時間

かすかなる音に降りいで葉牡丹の細かき襷にひかる初雪

その香失せほのかに紅をとどめいるドライフラワー―薔薇の姿よ

つれづれに時に寄りゆく薔薇とゆう形保てるドライフラワー

朱も黄も朽ち葉となりて極月の地にはりつけり還りゆくべく

竹、椿、木斛、もくれん守りくるる木造平屋土壁の家

うつうつと風邪熱に臥すわが時を屈託のなき雀子の声

わが持ち時間いくばくならむ白粥におとす朝^{あした}の黄味あたらしき

(平成九年十二月)

和顔愛語

おおつこもり

窓々に大晦日の灯のあかし今宵の盆地幸あるごとく

新しき年の光にさざなみの遠賀の川のがよい流る

水かがみ遠賀川辺にいにしえの弥生人^{やよいびと}たつ明けのまぼろし

古里の元旦の未明ふれ売りの「起上がり小法師」の声なつかしき

水口に潜み動かぬ鯉の群ほの明かりして氷雨は止まず

おのが足いまだ歩けるよろこびにたどる畦道ナズナ花咲く

「和顔愛語」きょう新聞に得しことば日記にとどむ一行の文字

(平成十年一月)

きさらぎ

山鳩の声しきりなり春一番過ぎたる朝の空の青さに

きさらぎの光の中に若草を敷きて動かぬ点景の山羊

夕空にその骨格をさらし立つ冬木の梢にかかる眉月

一日一日友が孤独の時間うめ編みてくれたるモヘアの襟巻き

ゆるびたるボタン付くると針もてばきさらぎ八日の針供養頭つ

片隅にありて安らぐわが戦後支えくれたる足踏みミシン

ひとり暮らしの老の限界感じつつ寒き夕べの野菜をきざむ

(平成十年二月)

四葉のクローバー

清々と余生送れと言うごとく白木蓮の花ひらきたり

アンテナのハシブト鴉の高音去り椿にひそむ目白鳴き出づ

わが街の盛衰を知る遠賀川岸辺はるかに菜の花明かし

収集まつ粗大ゴミの山 歩をゆるめゴミにあらざる物を見て過ぐ

パチンコ店の旗の文句に目を止めぬ 心の樂園めざしますという

通院の帰りのバス待つ道の辺に四葉のクローバー探すひととき

咆哮のごとき声あげ高台のわが家をおそう春の疾風は
はやて

(平成十年三月)

今年の桜

唐突におそいし激痛 昼も夜も脳細胞をいたぶり止まず

疲労、ストレスわが老身の衰えにまねきし病ヘルペスなりと

ウイルスに頭脳おかされ廃人とならんおそれに幾夜ありしか

頭部ヘルペス後遺症なる失明も神経痛もまぬがれて在り

やまい癒え自ともどりし安らぎのこころに仰ぐ今年の桜

邂逅、別離いくたりを経し歳月の彼方に花のかすみかかれる

ひかりつつはららぐさくら掌に受くる今年かぎりの花にあらねど

(平成十年四月)

おもかげ

れんげ田に花のかんむり首かざり作りし童らいずこへ行きし

足曳きてたどれば親し道の辺のカラスノエンドウ黄の母子草

古りし身に蘇りくる生氣あり庭の木草の若葉かがよい

脚立の位置しかとたしかめ雨樋の掃除しくるる孫を見守る

ロンドンへ英語学ぶと旅立ちの女孫に言わず老の杞憂は

「お母さん」とわれ呼びくる七人の思い込めたるそれぞれの声

亡き母の齡をこえて八十路なるわが老顔に残るおもかげ

（平成十年五月）

時

植え逝きし夫の知らざる時間過ぎ木々の茂りに小鳥は来鳴く

梅雨寒をこもり暮らすに家崖の合歡咲いでぬ時をたがえず

夕映えにいいよ華やぐ花合歡のうすくれないに揚羽まつわる

繁るにまかす老の草庭 季くれば擬宝珠ぎぼしは花茎伸ばし咲き出づ

度々のわが置き去りに雲隠れしてしまいたり枝切り鋏

ガラス戸に吸盤をはり身構える守宮やもりも久しきわが家の一員

大正・昭和・平成の世を渡り来て終の棲家の木草こそ友

声

おはようと声なき声の聞こえる朝顔一りん初咲きの紺

夏菊の供華よりいでし蟻をつぶす小さき命瞬時おもわず

コンクリートの護岸に幾度上り得ず小さき蛇くちなわ流されて行く

八木山の峠路今朝は見ゆるなり盆地の街も梅雨明け近し

一人分の千切りキャベツ僅かなれど音ここちよし暑き夕べの

「間違えましたすみません」と電話の声そのかぼそさが耳に残りぬ

真夜に鳴る隣家の風鈴 入院ながき主婦の面輪のふいに顕ちくる

(平成十年七月)

杖

暴走族の音に目覚めし午前五時ほのかに木槿の花開きおり

ともすれば惰性に過ぐす真夏日を凜々と咲きたり真紅の薔薇は

子を背負い荷を持ち上下せし坂をわが身ひとつにあえぎていたり

左右の足出し歩行の機能さえあやうくなるまで衰えし下肢

ぎこちなく杖つく吾にそそぐ目の暖かきありあわれみのあり

晩年のわれを支うる一本の杖を伴侶に歩いて行かん

「俱會一處」^{ぐえいっしょ}墓石に刻みし遠き世の先祖の深きころ思うも

(平成十年八月)

初 秋

夕顔は花を閉じゆき朝顔は咲き初むる頃か薄明の刻

その芋に飢えをしのぎし戦時あり菊芋の花荒れ地に咲けり

人が車が行き交う埃身にあびて狗尾草えのこくぐさはしなやかに揺る

行く先に幸あるごとく一群のメダカが上る秋の野川を

落蟬のまだ息あるを押さえつつ蟪蛄頭ずより食はみ初めたり

壁画に見し迦陵頻伽かりようびんがさながらの雲が夕べの西空を行く

おだやかに生を終えたしうす紅の芙蓉はひと日の花とじて散る

(平成十年九月)

月光

夜を通し降りいし雨の過ぎゆきて鵲の高音に盆地明けゆく
婿と孫の作りし新米香に立つを今年も頂く八十路を生きて

竝び咲き風にゆれいし玉すだれ 花を閉じゆく黄昏の時

庭木々にわが身に今し差すひかり平成十年十五夜の月

音もなくめぐり来たりて清かなる月光あまねく照らす安らぎ

仰ぎいるわれの醜き心までしみ透りくる名月の光

又しても友傷つけし失言に己おのれさいなむ秋夜の目覚め

抽象模様

球根の一つひとつの秘めもてる花の命を待み植えゆく

培いし年々の花描ききていまだ現わせずその花の美を

離^{さか}りゆき又近ずきて鳩一羽スケッチのわがめぐりに遊ぶ

大いなる山に向かい描くわれ阿蘇高原の一草となり

おのずから力はこもる根子岳の鋭き峯の起伏描くとき

寿齡の節目に描きし自画像 八十の老顔かけず三歳すぎたり

それぞれの位置得しごとく濡縁に落葉が画く抽象模様

(平成十年十一月)

独り言

朝々の桜落葉を掃くわれに見よとて一枝返り花咲く

街路樹の落葉の無残・踏みしだかれ彩を形を失いてゆく

不器用な手つきに障子張る背後いつかやさしき姑のまなざし

こもり暮らすわれに出でよと鵲啼く明るき声の透る小春日

清々と冬田にいくすじひこばえ薬のみどり楽しみ杖つくわれは

八十三の誕生祝モンブラン万年筆は死後も残らん

独り言思わずもらしいる寒夜 晩年独居の二十三年

(平成十年十二月)

老人力

連山のたなびく雲にかがよえる初日はやがて盆地に満ちん

わが一生の最後とならん卯歳なり何はなくともただ惚けずあれ

遠賀川原にペットの兔放ちやり子らと声あげ追いし日ありき

霜にも負けず雪にも負けずスイートピー細き巻きひげ絡め伸びゆく

わが留守に千両の朱実食あけみべつくし小鳥は糞を残しゆきたり

俯きて杖つき歩むわがめぐり雪ははらぐ鼓舞するごとく

現身の老衰なげかずなお持てる老人力に楽しく生きん

(平成十一年一月)

慈雨

六代のお墓を田を守り^も九十歳の従兄逝きたり古里は雪

放し飼いの鶏自在に遊ぶ庭 季節の花の絶ゆるなかりき

きさらぎの七日夫の命日忘れずに嫁より届く早春の花

わが為に亡夫の作りし切抜帳 歌壇 歳時記の紙黄ばみたり

靴底の模様つづける雪の路地たどりつつ行くごみ袋さげ

チヨツチヨツと鳴く音^ねまねするわが声に小首かしげて応^ひうる^{たき}鶺鴒

草木の芽ぬらして降れる昨夜の慈雨 春待つ老の心もゆるぶ

(平成十一年二月)

三 月

鶯の笛鳴き聞こゆくり返すそのひたすらな声は身にしむ

啓蟄のナメクジ一匹おもむろに木斛の幹のぼりはじめぬ

忽然と早春の空截りて行く飛行機雲の音なき一線

何買うにあらねど歩くアーケード街ウインドーのひいな雛に心よりゆく

閉店の張紙のあり幾度か友と語りし茶房「伽羅」きやらも

繁華街それで杖つくわが歩み裏町通り沈丁じんちょうかおる

みどりさやかに子の漬けし莖漬うまし 農家に嫁して三十年経し

(平成十一年三月)

巢立つ

杖つけばいまだ歩けるよろこびに桜並木の落花ふみ行く
ベンチあればしばしば憩う紺青の空に花房ゆるるを見つつ
花びらのひかり散りくる庭の草引き居ていつか愁い忘れつ
われと共に齢かさねし桜木の花見納めとなる日来たらむ
ふる里の「独立自尊」諭吉の碑仰ぎて他郷に発ちし若き日
暖衣飽食になれたる孫の巣立ちあやぶむ思い言わず励ます
宿舎の壁かざるわが絵持ち行きし女孫の孤独おもう夕べは

(平成十一年四月)

車椅子

老いの身に生氣わきくる胸ふかく蜜柑の花の薫り吸う朝

里人に逢いし思いにたたずめり俯き咲ける翁草のまえ

蕨つむ丘の斜面のハルリンドウ踏まれずにあれその小さき花

ためらいつつ初めて乗れる車椅子押す子の力に運ばれて行く

やすやすと車椅子にてめぐる園ひくき目線に親し花ばな

高原のみどりの風にゆれ止まぬポピーのささやく如きくれない

車椅子降りて杖つき踏む大地 生ある限り歩み行きたし

(平成十一年五月)

老いの日常

煮つめゆくマーマレードの香り立ち琥珀の色につやめき来たる

うずくまり板張を拭きワックスを塗るかかる間に心なぎゆく

テレビ見つつ共に声立て笑い居るわれに驚く雨にこもりて

迷い入り小さき羽虫いねがたく起きて書読むわれにまつわる

生きて居た今日の証に書く日記、六月十日夏椿さく

櫛の歯の欠けゆく如く繁華街シャッター下ろせる店のふえゆく

閉山後の財政支えしオートレース不振つづける街に住み古る

(平成十一年六月)

初蟬の声

七夕の星に捧げて一夜ありし待宵草の花しばむ明け

二億五千万年生きつぎし銀杏という鳥の恵みにわが庭に生う

季くればこぼれ種より芽吹き来ておしろい花も路地に久しき

わが庭の空をせばめて茂りたる木蓮の広葉たたく雨音

ハタハタと蛾が灯をしたい窓叩くひとりの食器洗う厨の

昂りてもの言いし後のさびしさを幾度かさね老いゆくわれか

木斛の葉ずれの音にまぎれなく澄み透りくる初蟬の声

(平成十一年七月)

法師蟬

病葉より散りてゆくなり八月の桜落葉は忽ち干ぞる
わくらば

止まらぬ時の速さにつぎつぎと花火は空に咲きて消えゆく
とど

生と死を分かつ命の確かさに墓所の道辺の露草の花

霊在わすお盆三日のひとり家の眠りは安しうつつ見えねど

生前の美醜はあらず頭蓋骨 眼窩 鼻孔ただ暗き穴

噛み締めしむき出しの歯に人生の深き悲しみある頭蓋骨

あと幾年生くるか知らずうたた寝の夢路断ちたる法師蟬の声

(平成十一年八月)

ヤブラン

朝の庭に立ちて真向う龍王の山に安らぎひと日を過ごす

み仏に切る百日草・千日紅いのち咲きつぐ花の明るさ

かまつかに鮮紅色の見え初めて葉月十日の誕生日来る

衣食住何不足なき明暮れの八十四歳おろそかならず

揺り椅子に掛くればいつか眠くなる在りし日夫もかく眠り居し

うす紫のヤブラン咲きぬ山路行き夫と採りし日思い出づるも

巷の疲れ曳きて帰りし夕路地におしろい花のかおりただよう

(平成十一年九月)

病 む

家崖に山萩しだれ咲く頃か思い出では昼をまどろむ

絶食のわれを支うる点滴の銀のしずくに安らぎ眠る

こぼれ花孫のあつめ来しキンモクセイ病む枕辺に一夜を香る

カーテン一枚へだて病み臥す隣人の互かたみにふれずその身の上は

ゆつくりと流るる時を忘れ居しただがむしやらに生きて来にけり

わが寝息たしかめて去る看護婦の足音しずかに真夜の病廊

八十四年ただ茫々と過ぎ行きて術後のわれになお明日あり

(平成十一年十月)

病
床

ミニバラのピンクつぎつぎ咲きそろう花のコーラス聞こゆる如し
ほほえみをたたえもの言う看護婦のやさしさ持たず吾は生き来し

鳥の声、葉ずれの音もはるかにて入院暮らしの雑音に慣る

一畳のベッドに起き臥す病身のつやなき爪の伸びゆく早さ

改めて病みて思うも内蔵の働きありて生くる身なるを

白き部屋、白き寝具に眠る時この世離るるとき寂寥

ホトトギス、秋明菊も散りおらむ夜半のしぐれの窓たたく音

顔

病棟の中庭に陽のさし初めて葉牡丹の渦霜にかがやく

生き残る羽虫寄り来て蜜をすう八手の白きまろき花咲き

車椅子に運ばれて行く渡廊下限られし視野に翔ぶ鳥を見ず

絶食十日許されて食す白粥の咽喉のみどを下る 生きねばならぬ

祈ること忘れて過ぎし幾日か病苦に負けし吾をさいなむ

熱引きて目覚め深夜わが看とりに疲れし娘のうたたね寝の顔

点滅のクリスマスツリー病む者の顔を一瞬明るくてらす

(平成十一年十二月)

朝
光

事も無く明けたる西暦二千年ひかりは満つる盆地の街にも

入院三月かにかくに命あり得しわれを迎うる椿、山茶花

窓ごしに眺むるわれに木々の声 元氣を出して庭面歩けと

地にひくき三色堇の花びらにさやりて過ぐる初春の風

ふた取れば七草粥の香りたち病室に明るき空氣流るる

洗面所の鏡に真向うわが貌のまさしく嫗となり果てにけり

朝光に雪とけゆけば中庭の芭蕉の破れ葉^や立直りくる

散
華

病室の窓開け放つ立春のひかりの中に雀子の声

移り来て四十七年夫と子の造りし狭庭苔ふかみたり

夫の好みし岩根絞の椿咲ききさらぎ七日の命日来たる

二十五回忌夫の法要終えし夜を現身われは安らぎ眠る

車椅子操りおのが軀を運ぶ腕にいまだ力ありたり

冬木立うつし静もる泉の絵杖曳く試歩をしばしとどむる

立枯れてひかり失せたるすすき原散華さんげのごとく雪は舞い散る

(平成十二年二月)

メダカ

一様に風にゆれつつ雑木々の芽吹きやわらかき彩ふかめゆく

今はただ無心となりて草を抜く病後の指の土の感触

いたぶりて疾風去りたる夕庭に白木蓮の花を閉じゆく

鍋かこむ子と孫と居て湯気の中きょう一日の話題はつづく

いろどりよく孫の作りしクリームシチュー病後のわれの胃にやさしかり

水槽にメダカ一匹死にてあり留守居のわれの午睡せし間に

雪柳れんぎよう桜散りゆきて何に心急せかるる老いか

雲

庭石を音なくぬらす春の雨くぼみに水のたまる間まの刻こく

よりそいて道の辺に咲く母子草 夕日ひととき黄の花に照る

点々とあら草なかの小さき花庭石菖にわげきしょうのひと日のいのち

夢うつつ予後の身おそう激痛に救急車にて運ばれて行く

点滴にいのち保ちてきよう幾度病室の窓をよぎる雲見し

二十日余の再入院におのが軀みのもろさ命のあやうさを知る

眠剤をのみてねむりに入る夜々われに醒めざる時は来たらむ

(平成十二年五月)

初夏

なつかしき香りに咲けり野茨の花むら明かく今朝の試歩路に
わが病みて無人となりし坂の上の平屋^えにおいて茂れり木々は
開け放つ縁より窓より初夏の風は古屋を吹きぬけて行く
草々の生いたる庭にアマリス紅の大輪すつくと咲けり
プランターに三色堇は咲きつげり^{こぞ}去年より今年われは病みいて
夏蜜柑ふとりて枝のたわむまであまた実を垂り初夏の日に輝る
鍵をかけまた暗闇の箱となるわが家をたのむみ仏と亡夫に

(平成十二年六月)

路傍の花

唐突に屋根をガラス戸を打つ音の雹のつぶてに呆然と居つ

天変地異つね忘れ居るおろかなる身にひびくなり雹の乱打は

雷雨雹去りたる庭に這い出でてとかげの親子の動きす早し

曇り日の子らの声なき遊園地しろつめ草は風に遊べり

日脚ながき庭に出できてつれづれに摘む花がらの掌に余りつつ

涼風を入れんと戸を操る午前五時わが目を醒ます露草の青

くるしき時かなしき時に折々の路傍の花に励まされ来つ

(平成十二年七月)

ひぐらし

コンコルド墜落ニュース聞く窓辺とんぼ自在にきらめきて飛ぶ

病臥のわれに見よとて白雲の描く象形 空の真青に

癒ゆるなき病む身にしむも今生の限りを鳴ける蟬の声ごえ

人の逝くむなしさやがて知りゆかむペットの死をば悲しむ孫は

「ハイ笑って」つつじの苑に子の撮りしわれの微笑は遺影とならむ

天井ゆ下がり近づく蜘蛛いっぴき仰臥の腕かいなのびてつぶせり

定命の時を惜しむかひぐらしはたそがれどきを声ひきて啼く

(平成十二年八月)

新 秋

求め来て吾子の培う大賀蓮 おおがはす 太古おもわせひかる露の玉

えび目高どじょう田にし水槽に共に棲みいて事も無き日々

真日に向きひるがお咲けりいましばし明るさ保ちわれも生きなむ

ふるさとの若き縁者の訃報きく耳朶にはるかな法師蟬のこえ

純白の花玉すだれ咲き初めて秋めぐり来ぬ病みてひと年

残されし思いに覚めつ汗たりて夢に逢いたる亡友いくたり

月明に一夜をありし烏瓜の絨毛の花とじゆくところ

(平成十二年九月)

むかご飯

ゆたかなる稔りよろこぶ声かとも稲田に沿える川のせせらぎ

落穂拾いし日は遙かなり一群の鴉刈田に落穂ついはむ

えのころ草ゆるる畦道ひさびさに土を踏み行く一步一步を

ありがたく秋を頂くむかご飯ほのあまき香に母の面影

姉の編みし形見の竹の花籠に今宵十三夜の秋風を盛る

昇る太陽背にうけ下る坂道の彼方にあわし没しゆく月

齢には不足なきわが老いの身のなお待つ思い二十一世紀を

(平成十二年十月)

暮秋

あまたまろべる朝の小道の団栗を踏み行く外なし杖を曳く身は

プチプチとわが靴底に音たつる団栗いがいに明るく弾み

農薬を肥料を知らず淡紫の野菊はそそと季知りて咲く

ゆくりなく仰ぎし空の鰯雲　ふるさと豊前の海を思わす

わが好み知る子の作る卯の花の香りただよう秋の夕べに

高熱痛み出ぬ日つづけばこのまま癒えてゆくかと思う小春日

孫よりの誕生祝の安眠枕　古りし脳なづきを夢路へさそう

（平成十二年十一月）

味

黄に朱に散りしく落葉ふみて行く　われに最後の秋かも知れず

傍線もまっすぐ引けなくなりし手をなお支えとし立居する日々

ひさびさにわれの作りし卵焼き味噌汁うましと風邪に臥す娘は

日本海の砂泥底に棲むとゆう蟹の目玉がひかる灯下に

任地より子の送り来しずわい蟹潮うしおのかおるその身の甘さうま

何にこころいら立つ孫か野菜きざむ包丁の音今宵はあらし

わが後のちに思い出づるや筑前煮孫に教えつつ作るこの味

(平成十二年十二月)

わが家

ひさびさの帰宅のわれを列なして路地に迎える水仙の花

裸木となり真つ直ぐに空をさす銀杏の梢に今初日さす

苔生うる狭庭いろどるくれないの千両万両やぶこうじの実

地に還ること叶わずに年越しぬ蜘蛛のふる巢の枯葉いちまい

古き家にうからつどいて団欒の明るき声のみつる正月

ふすま障子畳のわが家に眠る夜のおのずからなる安らぎ来たる

老残の顔にいくすじ寄る皺の喜怒哀楽の一生の証し

(平成十三年一月)

きさらぎ

目覚むれば窓外は雪 点滴にいのちつなぎて幾刻すぎし

天よりの清めの塩か美しき結晶となり雪は舞い散る

病廊をさまよう老の後を追う足音も消ゆ寒き深夜に

定まらぬ体温に一喜一憂の病室の窓に日脚のび来ぬ

みぞれ降る団地を再び巡りいしチャルメラの音の遠ざかりゆく

寒風の庭にならべる鉢植えの本草それぞれの春待つのち

おもむろに翅をひらきし凍蝶いてちようのきさらぎの陽にたゆい行けり

(平成十三年二月)

あとがき（歌集『坂道』より）

この歌集は、子供たちが私の喜寿を祝い、記念に出版してくれたものです。昭和四十一年より平成二年までの二十五年間の作品より、四百五十首を自選して編集いたしました。

短歌の道に私が入りましたのは、五十歳のときでした。まったく遅い出発でしたが、『ゆり』短歌会の故・手島一路先生の暖かい懇切なご指導をいただき、お陰で今日まで何とか歩みを続けてまいりました。先生のご指導のなかでも、とりわけ、「日々の生活のなかでの感動をのがさないように把握して歌うこと、そしてそれは真実であらねばならない」ということを座右の銘としてまいりました。また、表現はつねに工夫すること、欠詠しないように努力すること等のお言葉もわすれられません。

この二十余年間、『ゆり』誌へは欠詠せずにまいりましたが、なにぶんにも才無く、いまだに感動を一首にまとめて表現することが満足にできず、苦しんでいます。したがって、この書は歌集というにはあまりにも诗情乏しく未熟な作品であり、私の自分史にすぎませんが、お暇の折にお目通しいただければ幸いに存じます。

私の家は、坂の上の高台にあります。今日も美しい夕焼が逆光の山脈の空を染めています。私はなお明日に向かって、健康のゆるすかぎりこの一条の道を歩いてゆきたいと思っています。おわりになりましたが、『ゆり』会員の皆様のご交情に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともよろしくご鞭撻くださいますようお願いいたします。また、この歌集上梓につきまして、二十余年来の親友折原喜代様のお力添えをいただきましたことに深く感謝いたします。

平成三年十月

柏木志津子